博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　黒木　英充　印

学位申請者　Khalil Dahbi

論　文　名　Definitional Struggles, Field Assemblages, and Capital Flows: A Comparative Sociogenesis of Post-Independence States in Morocco and Tunisia

＜審査結果＞

2020年9月4日、黒木英充（主査）、松永泰行（主任指導教員）、青山弘之 、飯塚正人、酒井啓子（千葉大学教授）からなる審査委員会は、Khalil Dahbi 氏より提出された博士学位請求論文 “Definitional Struggles, Field Assemblages, and Capital Flows: A Comparative Sociogenesis of Post-Independence States in Morocco and Tunisia” の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

＜論文概要＞

本論文は、権威主義国家の生成と変容に関わる新たな分析アプローチの導入を、フランスの植民地支配からの独立（1956年）の前後期からのモロッコとチュニジアにおける政治界（political field）を含む様々な界の集合体として捉えられた国家の社会生成（sociogenesis）の分析を通じて行い、また政治界を含む様々な関係する界の変容過程の分析をモロッコにおけるハサン2世国王期（1961～1999年）の事例に関し綿密かつ包括的に行ったものである。

提出論文は英文で執筆され、全548ページに亘るその構成は下記のとおりである。

第1部　序説

1)　目的と目標

2)　文献改題

3)　分析の枠組み

4)　方法と資料

5)　論文の構成

第2部　国家生成

　1章　モロッコ

　2章　チュニジア

　3章　分析

第3部　国家変容

　4章　個人支配の終焉

　5章　界再編―コアプテーション過程と「オルタナンス」

　6章　分析

結論

ビブリオグラフィー

序論では、論文の（１）権威主義国家の生成と変容の研究への新たなアプローチを導入、および（２）モロッコとチュニジアの権威主義国家の社会生成（sociogenesis）のよりよい記述の提示という二つの主目的が提示されている。これらの目的のため、本論文では独立後のモロッコとチュニジアの事例を、ブルデューの政治界（political field）という概念を分析上の入り口と位置づけ、それぞれの国における政治なるものの生成と発展過程を分析するとされる。同時に、本論文では、物質的および象徴的レベルでの分析を、それらの間の相互構成的やりとりを加味して、分析とそれが生み出す説明的叙述の範囲に含めることが明示される。またゴルスキーが 2013 年に提示した歴史分析への応用、さらにアレンが提唱する位相幾何学的（topological）な国家へのアプローチを採用することが明確にされる。

第 1 部では、モロッコとチュニジアのそれぞれについて、フランスの植民地支配からの独立（1956 年）後に、政治界（political field）を含む様々な界の集合体として捉えられた国家が新たに生成されるの過程の社会生成（sociogenesis）分析が、1954 年頃から 1960 年代末までに亘り行われる。さらに、両国の比較分析を通じて、一般化可能な過程に関する知見が取り纏められている。

第 2 部では、モロッコに焦点が当てられ、1965 年の非常事態宣言後の権威主義国家の個人支配化の傾向性を強める方向での政治界の変容に始まり、野党勢力のコアプテーションを進んだ 1990 年代のオルタナンス期（Alternance）に至る過程における政治界他の変容が、ブルデューの分析枠組みを軸に綿密に分析される。

結論では、ブルデューとアレンの分析概念を使いながら、分析上の発見の再提示がなされる。さらに、他の分析方法と比較におけるそれらの発見の学問的意義についてもまとめられている。

＜審査概要および評価＞

本論文の意義は、次の 2 点に集約できる。まず第 1 に、分析的な側面においては、近年公刊されたばかりの講義集を含めたピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）の数々の著作とブルデューの分析概念を動態的な歴史的過程の分析に当てはめるためのフィリップ・ゴルスキー（Philip S. Gorski）の議論を受容した上で、植民地支配からの独立という政治界の生成分析に最も有効な時期のモロッコとチュニジアを事例とすることで、非西洋の文脈における近代国家の生成と変容の過程の分析を 1 次資料等に基づき行い、一般化可能な知見を取り出したことにあるといえる。加えてその際、ジョン・アレン（John Allen）の位相幾何学的（topological）な国家分析アプローチを加味することで、政治界を含む様々な界の集合体（assemblage）として捉えられた国家の分析において、対象の流動性と動態性を見失わない新たな関係学的視点を用いている点も特筆される。第 2 に、実証研究的側面においては、モロッコ・チュニジア両国で資料収集を行い、関係する当事者の叙述等を含む 1 次資料等に基づき、独立前後期より 1990 年代末にかけての 40 年余りに亘る時期における政治界他の生成・変容過程を優れた分析枠組みに基づき綿密に実証分析した点が挙げられる。

提出された形態における本論文に関する潜在的な問題点あるいは批判は、次の 4 点に総括できる。まず第 1 には、副題にあるようにモロッコとチュニジアの国家の比較研究ということであれば､両国に関する分析がバランスの取れた形で行われることが予期されるが、そうなっていない（途中からモロッコのみの分析となる）点。第 2 に、1 次資料としてフランス語資料が広範に用いられているが、アラビア語資料が相対的にかなり少ない点。第 3 に、既存研究の批判と総括が、研究の視点や分析枠組みが本論文と対照的であるものに終始しており、本研究が既存研究の発見をいかに改善したのかについては必ずしも明確でないこと。第 4 に、本研究が行っていることは、新たな資料や事実関係の発掘に基づく研究の独自性の確立ではなく、既存の歴史的および社会科学的な叙述の新たな分析枠組みによる再構築（再解釈）に重点があるとの点。

これらについての Dahbi 氏の説明および反論は以下の通りであった。第 1 の点については、1956 年の両国の独立の前後から 2011 年のいわゆる「アラブの春」政治変動までに亘り、両国における政治界の生成と変容のバランスのとれた比較歴史分析を行うとの当初の計画を、発掘した 1 次資料の膨大さとそれに伴う必要となる分析作業の増大を踏まえ、途中で変更することを余儀なくされ、国家変容を扱う論文の第 3 部については、独立の前後から 1999 年に没するまでモロッコの政治界で圧倒的な権勢を維持したハサン 2 世国王の治世に焦点を当てることにしたこと。第 2 の点については、フランスの植民地支配を経て独立国となった両国の独立直後期の政治エリートの言説や当事者の社会認識に関わる本研究のデータとなる 1 次資料が圧倒的にフランス語で著されていること。第 3 の点については、

指摘の点はその通りであり、論文を改稿し出版する際に改めたい、また第 4 の点については、政治界を含む様々な界のボトム・アップな生成・変容過程に焦点を当てた国家の社会生成分析を包括的に行うことだけでも十分な学問的意義があるとのものであった。

＜最終試験とその結果＞

最終試験は 2020 年 9 月 4 日(金) の 15 時 30 分より 17 時 30 分まで Web 会議システム（Zoom）を用い公開で開催し、本人による総括に続き、各審査委員との質疑応答を行った。上記の疑問と批判に関する審査員から出された質問に対し、Dahbi 氏はそれぞれ丁寧に納得のいく回答を行った。

以上の論文審査と最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が学術的に重要な貢献をもたらすものであり、Khalil Dahbi 氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。